



小川眞里子 『フェミニズムと科学/技術』

塚原, 東吾

(Citation)

化学史研究, 30(3):193-196

(Issue Date)

2003

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005666>



小川眞里子『フェミニズムと科学/技術』

双書「科学/技術のゆくえ」，岩波書店，2001年，
本体2100円，ISBN 4-00-026636-5

著者小川眞里子氏は，科学史家にとっては，生物学史や疾病史の研究者である。ほかにもロンダ・シービンガーの翻訳・紹介者としても知られているように，これまでも多くの訳書や解説などを通じて，ジェンダーと科学技術・フェミニズムの立場からの科学技術批判についての先駆的な論陣を展開してきている。本書は，後者の領域にかんする小川眞里子自身による待望の書き下ろし

書である。

なによりも本書は日本ではまだまだ研究の実績の浅いこの複雑かつ広範な分野を丁寧に網羅的にあつかつており、目配りの効いているものである。本書が世にでたことは、この分野の存在と達成の宣言であり喜ばしい。これが小川の長年にわたる着実な努力の成果であることはまちがいない。

ジェンダー論やフェミニズムの諸潮流についての論議はあちこちで盛んだが、日本でまだ、これらの視点から「科学」や「技術」に切り込むことが本格的になされるような成熟的な展開を迎えていない。(もちろん、生命・医療・身体論分野は若干別であり、日本での現状に深くブロープを下げた優れた実証研究が続々と産出されている。)

しかしジェンダー研究からの科学技術へのつつこみがいまいちであることは、単に残念であるという切り口で語ってはいけないものだと考えている。ジェンダー研究・フェミニズムの立場から科学技術の問題をあつかうことの困難さ、もしくはある種科学技術の問題の「ネグレクト」・「イグノランス」は、研究者層の薄さやジェンダー研究および科学論双方の「翻訳学派」的な伝統によるところが大きいのはたしかだが、それだけの理由によるものではないだろう。日本のジェンダー研究および科学史・科学論研究のもつ「浅さ」は、特にアカデミックなスタイルに拘泥するあまりに、日本の文脈での社会問題への切り込みのあまさが抜けきれないという、双方に共通するひとつの特徴が奇妙に合致した結果であると考えたほうがよいと思われる。さらに評者はC. P. スノーが指摘した「2つの文化」の亀裂の特殊日本的展開が、フェミニズムやジェンダー研究のような、社会改革的もしくは社会的矛盾から先鋭な問題意識を突きつけられて動いている分野において、特に象徴的に現れているのではないのかと考えている。

そもそも科学論・科学史研究とは、「2つの文化」の架け橋を志すものであり、また現実の社会問題・構造的矛盾からの突き上げに敏感に対応していかなければならない性格のものであろう。敢えて広範囲にして錯綜する「2つ(もしくはそれ以上)の文化」の荒波に身を投じて、このように「フェミニズムと科学/技術」の混沌の海にとりあえずは日本語での橋を架けた小川の試みには、なによりも敬意を表したい。

本書は、5章構成となっており、おのおのテーマ設定は

この分野を網羅することが意識されており解説書的な形態をとっている。このことから、本書を確立した研究書もしくはある種のオリジナルな論陣をはっている本であると考えるのは若干不十分であると批判するのは容易であるかもしれないが、現在の日本でのこの分野の状況を考えれば、本書のナラティブやスタイルはリーズナブルなものであると思う。

なかなか魅力的な序は、うまく読者をつかむことだろう。小川の語りに引き込まれる。そして第一章では、科学とフェミニズムの界面を検討するモチーフが、近年の科学論・フェミニズム双方の研究動向を参照にして展開される。いわゆるクーン主義およびクーン以降の科学論の問題意識と、フェミニズムとの接点がどのように形成されたかが論じられる。とくに科学知識の普遍妥当性や客観性といった「神話」が崩壊してゆくこと、その中でジェンダー概念がそれらの「神話」の成立を分析する手段としてどのような有効性を獲得してきたかが跡付けされる。そしてフェミニズム的な立場から、科学知識のありかたそのものを問うてゆく「お膳立て」が、どのようにしてできてきたかが紹介されている。

第一章の最後には、「他分野のフェミニズム研究」という節があり、ここでは美術史との対比でフェミニズムからの科学への切り込みを論じている。一読では若干違和感があり付け足し的なものと思われたが、再検討してみるとなかなか味のある部分で、科学という分野へのアプローチに、美術がよい参照項になっている。これなどは、紙面の制約のないところで、本格的に論じていただきたい部分である。

さて、科学・技術に関するジェンダー研究・フェミニズム研究では、とりあえず「科学における女性」の研究と、「科学に読み込まれるジェンダー」もしくは「近代科学の見せかけの客観性のなかに存在する男性中心主義的なバイアス」を指摘する研究に一般には大別されているといってよいだろう。たとえば科学史における優れた女性科学者の研究や、教育機関における女性割合の歴史の変遷などが前者であり、フェミニストの科学を検討するのが後者である。もちろんこれらは排除しあう性格のものではなく、相互に補完的なものであり、それも単に補完しあうものではなく相互に拡張的に援用しあう方法論である。本書では、第2章・第3章で、「科学における女性」を主に論じ、第4章・第5章では科学はどのようにジェンダーが反映しているのかを論じる構成をとってい

る。

第2章は「科学における女性」、第3章は「日本の女性科学技術者」と題され、主な先行研究の概観を行っている。第2章ではシーピンガーの紹介者として、科学史を女性科学者の観点から論じることでは出色である小川が、多くの史料を縦横に紹介しており読み応えがある。ただもちろん、紙面が限定されていることから、これで一書、もしくは数冊分の内容をもったものであると考えられる。充実した脚注はこの分野の絶好のガイドとして、評者も大いに参考にさせていただいているが、この分野に参入しようという初学者には不可欠な文献の一覧になっているといえよう。

教育面でのジェンダー・バイアスの問題などを、世界各国の理系の女子学生数の歴史の変遷の比較などを追って論じる第3章について、評者はこれに通暁しているわけではないので評価はひかえるが、すくなくともよい概観になっていると考えられ、勉強になった。ただ明治維新から終戦までを論じた第3章1の冒頭で、科学者ではないが医療に関与した最初的女性としてシーボルト・イネを挙げているが、これを「イネのほかに女医として楠本イネの名も挙げられるが詳細は不明である」とされているのは、都河・嘉ノ海の典拠に依っているとはいえ訂正を要するだろう。詳細は明らかである。シーボルトの娘であるイネは、母方の生家である楠本家の姓を名のっているので楠本イネとは同一人物である。石井宗謙・二宮敬作などに産科を学び、明治3年に東京で産科を開業した人物で、わが国の最初期の蘭方（近代的）女性医師である。大村益次郎などとも交流があったことは、かつてNHKの大河ドラマにもとりあげられたことがあり、浅丘ルリ子が生じたのがこのシーボルト・イネであり楠本イネであることは日本医学史では膾炙されている。ここは本書で唯一の点睛を欠く点である。

第4章は、科学とジェンダーという課題について、おそらくもっとも理論的にせめぎあいのある問題を扱う章であり、本書を手にする読者の関心がもっとも多く向けられると考えられる部分である。

ここではまず「科学的思考＝男性的」とであるという図式が広く信じられていることを反証する。そしておもに科学における客観性という概念の（男性中心主義的）性格を中心に論じるが、残念ながら、ここではハーディングの理論（小川の訳語では「立場理論」。「強い客観性・弱い客観性」）やハラウェイの議論（「観点観測論」：評者）

などは、先行研究としてさらりと触れられたにとどまっている。

その代わりにここで詳しく紹介されているのは、近年のオレスキーズによる「ヒロイズム」への読み替え、すなわち「科学＝客観的＝男性的」の本質は、「科学＝ヒロイズム＝男性的」であったのだ、という議論が中心に論じられている。しかし評者には管見ながら、オレスキーズの *Osiris* に掲載された一論文は、それほど一般的な射程をもったものとも、広い支持を得たものとも考えられない。またオレスキーズの議論と呼応するジョルダノヴァの科学者の肖像画についての議論は、どちらかという科学者のみにあてはまるというより、より広い文脈で、（たとえば第1章の終わりで触れられたような）美術史上での男性肖像画のヒロイズムとの関連が深いものであると考えられ、それほど重要な理論的な位置づけを獲得しているとも思われない。

どちらかというところ、科学的客観性などについてのフェミニズムからの批判という意味では、ハーディング・ハラウェイらの議論は、まだまだ検討しても検討し足りないものであると考えている。本書の解説的な性格から考えて、ハーディングらの議論を詳しく紹介していただきたかったと思われるし、評者はハーディング・ハラウェイの議論を発端に、科学のカルチュラル・スタディーズや、ポスト・コロニアル批判、さらには近代技術へのヴァンダナ・シヴァなどの環境アクティヴィズムからの観点での検討や展開があり、さらに深められるべき理論的な可能性もある概念枠組み（まさに「フェミニスト科学技術批判パラダイム」が着々と成立しつつある！）であると考えている。これらが、「現代的な課題」であることは見落とされてはならないのではないのだろうか。

続く「女としての自然」もしくは「自然としての女」という概念を論じる節では、イーズリーとマーチャントの議論を丁寧に論じており、端的なまとめになっている。ただ、マーチャントについては、『自然の死』があまりにも有名になってしまっているが、その後に何も展開していないかのような怠惰な論者ではないので、すくなくともマーチャントの新著の存在のみでも、注で触れて欲しかったところであるが、これはないものねだりであり、蛇足かもしれない。

これらの議論に続いて、「乳房と骨盤と家父長制」・「科学知識に読み込まれるジェンダー」では、シーピンガーなどの研究を背景に、小川が全面展開しているもので

あると考えられる。小川のまとめは、シービングーらの著作を通じていろいろと勉強をさせてもらった者としても新鮮であり、最近のジェンダーと科学史研究についての、ある種の「模範解答」を見せていただいたような思いがある。ただ、いかんせん紙数が足りないの、議論を尽くしているかどうか、もしくは独自の検討を展開したかというそれは不十分であると言わざるをえないもので、言いたいことが紙背に見え隠れしており、分量と折り合いをつけざるをえなかったであろう小川自身の苦勞の跡がうかがわれる。しかしそれでもこれだけ多くの理論的・歴史的な内容を双方うまく採配して、コンパクトに読める内容にしている努力に、なよりの賞賛を送りたい。再度になるが、この章も、脚注に挙げられる文献が充実していて大いに参考にさせていただいている。

終章の「〈女性問題〉から〈科学問題〉へ」は、短いものだが、フェミニズムによる科学批判が、科学の問題を扱う上で、本質的な転換をもたらしたものであることが確認される。言ってしまうと陳腐さも漂うかもしれないフレーズだが、アメリカでのテロのことから書き起こされ、筆者の「人類の英知を絞るべき(科学技術をめぐる：評者注)問題に両性の知恵を結集すべきであろう」という最後の言葉は、かなり重い現代的意味をもっている。いまや国家の側が「男女共同参画社会」というスローガンを「行政的」課題として進める時代であり、ある種、敵も味方も入り乱れており、また言葉や概念の濫用もはなはだしく、ジェンダーをめぐる問題については、実態として何を問題とすべきか、何をどのように変えてゆけばよいのかが再度根底から問われている。そのなかで、基礎的で迂遠な作業かもしれないが、分裂して機能不全に陥っているとさえ考えられるフェミニズムと科学・技術をめぐるさまざまな「知」の潮流をつなごうとする小川の架橋の努力にはなによりも頭の下がる思いである。小川によって到達した点は、続く世代への里程標を与えてくれているものであると考えてよいかもしれない。

小川があえて述べるように、本書は、生命論系統、特に生殖医療などへの言及はあまりしていないものである。生殖技術については、岩波講座科学・技術と人間の第9巻への論考に若干触れられているし、そもそも生物学史・疾病史などについては、小川には岩波『思想』に掲載されたコレラについての秀逸な論文もある。また本書は「技術」についてよりも「科学」についての言及が

多いものであることはたしかだが、女性と技術については、科学技術社会論学会の学会誌第一号へ与えられた小川の論文はコーワンの女性と技術(特に家庭内技術)についての著書などに詳しく言及したものであり、小川は精力的に関係各方面に研究を展開している。

悪い書評には、「かんちがい」系・「重箱のすみつつき」系や「ないものねだり」系がある。そして本書のような概説書には「ないものねだり」系の書評が多いだろうし、本評者の指摘もどちらかというところだったかもしれない。しかし本書で触れられていない領域について、小川への安易な「ないものねだり」は実は小川の活躍が幅広いものであるのしっぺ返しをくうことは上で述べたとおりである。実は「ないものねだり」とは、ねだるほうに、「それを自分で探しなさい」というべき性質のものであるのだろう。だからこれからの科学史・科学論研究の領域に、ジェンダー的観点、フェミニズムからの本格的な検討という豊穡で肥沃な世界をもたらす一局面をここまで拓いた先達としての努力に、後につづく世代には、これからの本格的な研究で何かを報いるのが期待されている一書でもあることを確認しておきたいと思う。もちろん、小川はまだ現役のばりばりであるが、小川が次の世代に託した書として本書を読むなら、それはこの本を成した小川の努力と知的ありかたに対するもっとも正当な応対になるのだろう。(塚原東吾)

フェミニズム的観点からの科学論についての新刊

Sandra Harding, *Is Science Multi-Cultural? : Postcolonialism, Feminism, and Epistemologies*, Bloomington: Indiana University Press, 1998.

The Science Question in Feminism (1986) で知られる、フェミニスト科学哲学の第一人者サンドラ・ハーディングの著書。近代科学のポストコロニアルな性格を描き、それに対抗するジェンダー論の立場から、「新しい(フェミニスト)科学」を、次の2つの概念を軸に提唱している。「強い客観性」(近代科学の客観性を「弱い客観性」とする)、そして「堅牢なる自己省察性(Robust Reflexivity)」。

Uma Narayan and Sandra Harding (eds.), *Decentering the Center: Philosophy for a Multicultural, Postcolonial, and Feminist World*, Bloomington: Indiana University Press, 2000.

ハーディングとナラヤンの編集による論集。17本の論文を収録している。ハーディングによる論考は、GED (Gender, Environment, and Sustainable Development) と、近代科学思想の関係を概観していて、後半、マニフェスト的なアジェンダを設定している。他の論考も力が入っている。

Donna J. Haraway, *Modest_Witness@Second_Millennium. FemaleMan^c_Meets_OncoMouseTM: Feminism and Technoscience*, Routledge, 1997.

ドナ・ハラウェイの1997年の著書。題を訳せば「謙虚なる目撃者@第二千年紀。オンコマウス（トレードマーク）と遭遇した女性：フェミニズムとテクノサイエンス」。相変わらずレトリシズムが特徴的で、タイトルからして普通ではない。でも、なかなか面白いが、これは語法にしても、文体にしても、難物。しかし、猿と女とサイボーグよりは読み易くなっているのか？ ハラウェイについては、日本では高橋さきのという優れた「解説者」がいるので、高橋の「解説」に期待をしたい。

Roddy Reid and Sharon Traweek, *Doing Science + Culture: How Cultural and Interdisciplinary Studies Are Changing the Way We Look at Science and Medicine*, Routledge, 2000.

ロディー・リードとシャローン・トラヴィーク編集の書。ここでのトラヴィークの議論は若干「脇が甘」く議論のツメに精細を欠く。また所収のジョアン・フジムの論考もジャパノロジー的なもんきりの二分法に依拠したため、新たな視点が開けているかどうかは少し疑問。「科学」についても「文化」についても今ひとつの感があ

るが、双方を扱う難しさは伝わる。だからわざわざ「科学と文化をする (doing science+culture)」なのだろうか。Fischer による最後の論文は、MIT での STS プログラムの教育の概要（これは訳出の価値あり、かもしれない。）

Alison Adam, *Artificial Knowing: Gender and the Thinking Machine*, Routledge, 1998.

AI における「知る主体」は「男性性」である、ということ进行分析していて、興味深い。第1章 “Feminist Resources” で、Judy Wajcman (*Feminist Confront Technology*, 1991; “Feminist theories of technology” in *Handbook of STS*) や Cockburn を引用している。序章だけでも面白いので、どこかに訳出する価値があると考えられる。

M. Mayberry, B. Subramaniam and L. H. Weasel (eds.), *Feminist Science Studies: A New Generation*, Routledge, 2001.

Muriel Lederman and Ingrid Bartsch (eds.), *The Gender and Science Reader*, Routledge, 2001.

この2点は論集（いわゆるリーダー）。収録論文は、ほとんど既発表のものでスタンダードなものだが、編者の収録の意図やその編集の仕方はおもしろい。知らないものも多く、最近の状況を概観するには便利。ただなぜルートリッジ社がこのような類似の本を2冊、それも同じ年（2001年）に出しているのかは不明だが、そんなに売れるのだろうか。前者はエッセイ風のもの、特に実例を挙げて論じたもの、自分の体験と、科学の専門家がどのようにジェンダー・フェミニズムと関わったかを自伝風に行っている著者が多く、学生（特に理系の女子学生）に読ませるにはいいかもしれない。後者はより学問的な（理論的な）ものの抜粋、押さえどころを押さえていて、なかなか参考になる。（塚原東吾）